59　やすらはで　寝なましものを　小夜更けて　傾くまでの　月を見しかな

赤染衛門

〈声に出してよんでみよう〉

ヤスラワデ　ネナマシモノヲ

サヨフケテ　カタブクマデノ　ツキヲミシカナ



月

＊語頭以外のハ行の文字、つまり、語中・語尾の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は、ワ行音「ワ・イ・ウ・エ・オ」でよみます。[1]　助詞の「は」も、現代語と同様、「ワ」とよみます。これを、「ハ行転呼音」と言います。

〈どんな意味だろう〉

ぐずぐずためらっていないで、寝てしまえばよかったのに、

（あの人が今来るか、今来るか、と待ち続けて）

夜が更けて、西の空に傾いて行くまでの月を見てしまったことよ。

＊　「やすらふ」は、ためらう、ぐずぐずする。「で」は、…ないで。

＊　「まし」は、反実仮想（事実に反する仮の想像）を表します。「ものを」は、逆接。

＊　文末の「かな」は、詠嘆を表す終助詞です。現代語と違って、疑問の意味ではないので注意しましょう。

〈解説〉

平安時代の結婚は、男性が女性の家に夜通って来るという「婿通い婚」の形態をとっていました。一人の男性が複数の妻を持つことも、普通に行なわれていました。夫の足が遠のけば、自然に離婚は成立します。夫の訪れを待つことしかできない不安定な立場の女

性の嘆きは、この時代、いくつもの歌に詠われています。

この歌は、しかし、相手の男性を恨むのでもなく、自分の立場を嘆き悲しむのでもなく、静かにじっと、夜が明けるまでとうとう眠らず待ち明かしてしまった自分を第三者的に眺めるような、諦めというか、悟りにも似た境地が感じられます。じたばたあがいたりうろたえたりするのではなく、自分の運命はこうしたものだと見据えたような、芯の強さ・覚悟のほどを、感じないわけにはいきません。

〈作者と出典〉

作者の赤染衛門は、10〜11 世紀頃の女流歌人。父は、赤染時用とも、平兼盛（→「40 忍ぶれど」）とも言われています。才女として名高く、時の権力者である藤原道長の妻の源倫子や、娘の一条天皇中宮・彰子に女房として仕えました。夫は、文章博士の大江匡衡。史料や文献を駆使できる立場にあることから、道長の栄華を描いた歴史物語である『栄花物語』の作者とする説があります。堅実で温厚な人柄で、誰からも愛されていたようです。

この「やすらはで」の歌の出典は、4 番目の勅撰和歌集（天皇の命令で編集された和歌集）である『後拾遺和歌集』（1086 頃成立）です。

---

1 ハ行の子音は、8 世紀頃に [p] から [ɸ]（現代語の「フ」の子音）に変化し、やがて 11世紀頃、前後を母音にはさまれた語中・語尾の [ɸ] が [w] と発音されるようになりました。なお、[ɸ] が [h]（現代語の「ハ・ヘ・ホ」の子音）に変化したのは、17世紀頃と推定されています。